住井すゑとその文学の里（四十四）

―牛久沼のほとり―

牛久市文化財保護審議委員　栗原（くりはら）　功（いさお）

特攻隊と鹿屋（かのや）・知覧（ちらん）・霞ケ浦（予科練）航空隊

犬田卯・住井すゑ夫妻の長男章は、東京物理学校（現東京理科大学）を昭和19年（1944年）9月に戦時下の繰り上げ卒業をし、文部省付属統計数理研究所の助手に採用されていたが、その章にも召集令状、俗にいう赤紙がきた。

ところで、日本は昭和18年（1943年）9月20日の御前会議で絶対国防圏を設定していたが、同19年の8月末にマリアナ諸島が攻略され、その一角が破られた。

一方、日本の海軍軍令部（主務は戦争指導）では、同18年7月ごろから、第二部長黒島亀人大佐指揮の下で「特攻戦術（航空機による敵航空母艦の飛行甲板への体当たり攻撃）研究と特攻兵器の開発製造」が進められていた。この特攻作戦を同19年8月11日の戦備考査部会議（軍令部総長永野修身元帥、海相嶋田繁太郎大将らが出席）において決定し、9月に特攻部が設置された。

同19年10月19日夕方、フィリピンのマニラ北方110㎞の距離にあるクラークフィールド基地（マバラカット飛行場）に駐留する第一航空艦隊本部に同艦隊長官に親補（しんぽ）された大西瀧治郎海軍中将が着任した。戦局は17日早朝より米軍マッカーサー大将率いる南西太平洋方面軍20万の将兵がレイテ島上陸作戦を敢行中で、対する日本海軍ではレイテ湾に栗田艦隊を突入させる作戦を立てていた。大西長官指揮の下で、栗田艦隊援護のため、米艦隊の空母飛行甲板目掛けて体当たりする戦史上類例のない神風特別攻撃隊敷島隊（250㎏爆弾搭載の零式戦闘機）隊員に、予科練（霞ケ浦海軍航空隊（※）の中に設置）出身の若鷲20数名が選ばれ、そこの教官を務めていた関行男大尉が隊長に任命された。彼らは25日の早朝、大西長官と別れの水杯を交わし飛び立って行った。海軍による特攻は同20年（1945年）3月11日に、菊水部隊梓隊の銀河24機および二式大艇2機が、本土最南端基地鹿屋（鹿児島県鹿屋市）航空隊より出撃、以後同航空隊より829名が出撃し、同航空隊は特攻基地として最も多くの戦死者を出した。ほかに鹿児島・宮崎両県下10カ所の既存基地からも出撃した。

陸軍は、首相兼陸相で参謀総長に就任した東条英機大将が同19年4月18日のB29対策委員会で『B29に飛行機で体当たりで行く必要がある』と発言。同年10月4日に教導航空軍司令官菅原道大中将より、鉾田教導飛行師団（鹿島郡下三カ村に設置）師団長今西六郎少将に特攻隊編成準備命令があった。20日に同師団において九九式双軽爆撃機による岩本益臣大尉以下16名をもって万朶（ばんだ）隊（万朶は、幕末の水戸藩で攘夷論を唱えた藤田東湖の『正気の歌』よりとった）と、24日に浜松教導飛行師団において四式重爆撃機（飛龍）による山本達夫中尉以下26名をもって富嶽（ふがく）隊が編成され、両隊はフィリピンに進出。万朶隊が11月5日にリパ飛行場から、富嶽隊は同月7日にクラーク飛行場からの出撃となった。その後鹿児島市の南、知覧（現南九州市知覧町）航空隊より439名が出撃し、さらに鹿児島・宮崎両県下4カ所の基地からも出撃した。

海軍の町阿見（同20年に5月27日の海軍記念日をもって町制施行）の「七つボタン」の制服で知られる予科練は、大東亜戦争で戦った技量に秀で旺盛な精神力の航空機搭乗員の大半を輩出していた。同19年後半からは特攻兵器として開発製造された人間爆弾ロケット「桜花（おうか）（ロケット付グライダー）」搭乗員の短期訓練が行われた。彼らの中から隊長三橋謙太郎大尉以下14名をもって第一神雷桜花隊が編成され、鹿屋基地からの出撃命令（同20年3月21日に九州南東海面で戦死）が下った。彼らを予科練の門柱の影でそっと見送る女性がいた。その人は予科練の母と呼ばれた。特攻機桜花などの訓練は百里原（現小美玉市）、谷田部・西筑波（現つくば市）、神の池（現神栖市）基地でも行われた。

航空機による特攻戦死者は、陸軍が1844名、海軍は2735名。20歳過ぎの者が最も多く、最年少者が17歳、最年長者は35歳でいずれも少数。本県出身者は、陸軍は30名余り、海軍が72名（鹿屋から出撃した牛久に深い縁のある者もいた）であった。

特攻には、海軍の水上特攻（震洋（しんよう）艇など）と水中特攻（ハワイ真珠湾攻撃に用いられた特殊潜航艇や人間魚雷回転など）があった。

➡子犬と遊ぶ出撃前の特攻隊員。彼らは数時間後に沖縄方面（海面）で散華（さんげ）した。…彼ら英霊に哀悼の意を表したい。―知覧特攻平和会館提供―

⬆掩体壕（えんたいごう）跡。ここに零戦（ぜろせん）、艦上爆撃機などが格納されていた。―海上自衛隊鹿屋航空基地史料館提供―

（※）同隊は大正10年（1921年）に開設され、当初は航空機搭乗員養成機関であった。山本五十六大佐（のち大将・元帥、連合艦隊総司令長官として真珠湾攻撃を指揮する）が副長兼教頭で同13年（1924年）12月から1年3カ月在任。練習生たちは『やってみせ言って聞かせてさせてみてほめてやらねば人は動かじ』を信条とする山本に心服した。